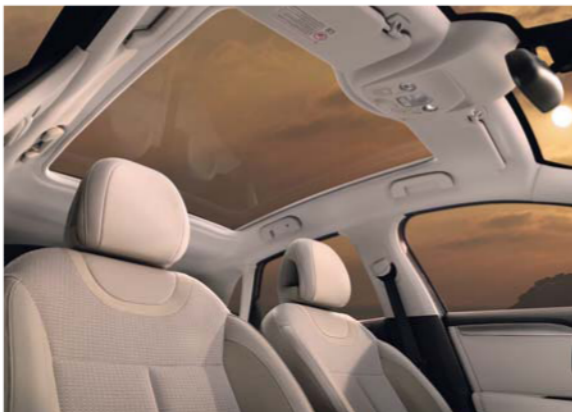


物語をつむぐデザイン。 やさしさと温もりの哲学

飯田侑希 (インダストリアル・デザイナー)



デザイン、とくに我々が日常的に使う工業製品のデザインには、ひとつの大きな原則が貫かれている。

『形態は機能に従う』

家電や家具などの場合、機能から発想して、機能を損なわない範囲でデザインを収めるのが、もっとも一般的かつ合理的なアプローチである。ロジカル、言い換えれば理系的だ。理詰めで無駄を削ぎ落とし、シンプルで長く使えるものこそ、多くの人にとってのベターとなるのだろう。その価値は認めるが、多くの人にとってのベターではなく「ひとりにとってのベスト」を選びたくなるときもある。

「若造のくせにと言われそうですが、僕は機能ありきで発想するのは好きではありません。機能を見捨てるわけではありませんが、手にした人がどんなふうを感じるのか。楽しんだり、誇らしく思えたり、持つ人の感情に訴えるデザインをしたいと思っています。感覚が文系的、なのかもしれませんね」

インダストリアル・デザインの王道が理系的だとしたら、飯田侑希さんのアプローチは確かに文系的だ。機能をまとめるのではなく、自分がデザインしたプロダクトが、それを持つ人との間にどんな物語をつ

むぐのかを、まず考えていく。置かれる場所、使われ方。背景を具体的にイメージするところから、デザインワークをはじめ。家具でもオーディオでも、発表してきたデザインにやさしさと温もりが感じられるのは、こうしたものづくりの哲学による。

工業製品としてのクルマは『形態は機能に従う』という原則のカタマリのような印象も受けるが、飯田さんはどんな視点でクルマを見て、選んでいるのか。

「やはりデザイン。確かに、クルマは理系的な発想が基本になると思いますが、エクステリアや日常的にふれるインテリアの部分に、文系的な発想、つまりデザイナーの思いが込められている。そう感じられるのが好きです。理詰めで機能を形にするだけでなく、乗る人との間に固有の物語が生まれることを想像して、デザイナーは線を描いた。勝手な思い込みかもしれませんが、そう思い込ませる魅力を求めますね」

最近のシトロエンは、飯田さんが「そう感じるブランド」のひとつだという。デザイナーが文系的な発想をしたのかは、わからない。

「でも、たとえば、C4の風景に溶け込むようなラインにも、あちこちに見られる特徴的な造形にも、そう「思い込ませる力」がありますよね。このクルマと一緒にいると、生活が変わるかもしれない。そして物語の始まりを予感させる……」

シトロエンのデザインを評価する、デザイナーらしい視点だ。「文系のデザイン。物語。こういう話をする懐古趣味だと思われがちですが、それは違います。古いものをなぞるのは簡単です。でも僕は、

古いものの価値は認めた上で、表現は現代的な解釈で行うべきだと思います。シトロエンは僕が生まれるはるか以前からクルマをつくっていますが、それを価値として認めながら、見る人をはっとさせる現代的なデザインをする。しかもそこに、文系的なエッセンスが少し、感じられる。僕のなかでの評価は、かなり高いです」

飯田さんは28歳。若手と呼ばれる年齢だが、シトロエンのデザインに共感するのは、そこに同じ哲学を嗅ぎ取るからだろう。「多くの人にとってのベター」ではなく、「ひとりにとってのベスト」でありたい。幸福な物語は、そこから生まれていくのだ。

Yuki IIDA

1982年静岡県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒。パイオニア株式会社デザイン部勤務を経て、2010年デザイン事務所LaLa Lab.設立。グッドデザイン賞、iF Product Design Award (ドイツ)の他、国内外のデザインコンペでも多数受賞。



灯りとしての「火」をモチーフに、焚き火を連想させるフロアライト『Fire』。世界進出を狙うデザイナーたちがこぞって参加する見本市、ミラノサローネ・サテライト出展作品(2011年)。

